

みなさん、こんにちは。初めに、今日の「正信偈」の範囲になりますところをご一緒に拝読させていただきます。十四頁ですね。ゆっくり読みますから声をお出しくださいませ、お願い致します。

顕示難行陸路苦 信樂易行水道樂

龍樹菩薩はさとりへの道を明らかに示し、
陸路をただ一人自力で歩く、
苦しい難行よりも、みんなと共に船に乗り、
仏力に任せて楽しく渡る念仏の易行道をすすめられました。

憶念弥陀仏本願 自然即時入必定

だから、阿弥陀仏の本願を忘れず心に憶（おも）い
念じるならば、本願自然（じねん）のはたらきで、
即座に、必ずさとりを開く身と約束され、
迷いに退かない身になります。

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

ただよく、常に如来のみ名を称えて、
大いなる悲願の恩恵に応えよ、と説いています。

どうもありがとうございました。

この前は三月でしたが、あっという間に五月になったという感じで、だんだん月日が経つのが早くなったような感じでございます。先程のお勤めは表（おもて）さんがご導師を勤めてくださいます、大変荘厳なお勤めが勤まりまして、嬉しく思います。ありがとうございます。

いつも初めに感じたことを申し上げておるのですが、大分昔の話になりますけれども、私が大谷大学を卒業して、本郷にあります東本願寺の教学研究所東京分室というところにご縁をいただいて学ばせていただきました。そこに後に大谷大学の学長になられた曾我先生のご門弟の方で、松原祐善先生という方がおられまして、大変情熱を傾けてご指導くださいました。

ある時、出勤して、ご本尊に参ろうと仏間に入りましたら、松原祐善先生が一人で「正信偈」のお勤めをしておられましてね。今の草四句目下です。それは本当にこう、大地から湧いてくるような、そういう本当に荘厳なお勤めをしておられました。勿論私もご一緒にお参りさせていただきます、大変印象に残っております。

松原先生は夏の安居を勤められたということがあって、講本を作成される時に一生懸命努力しておられたのであります。恐らく夜遅くまで勤められてですね、そのしんど、ということもあって、身体が勇躍してですね、大地から湧き出てくるような、そういうお勤めをしておられたのだなと、大変印象に残っております。

その松原先生は、曾我先生のお教えを受けられた方なのですけれども、曾我先生も毎年五月と秋に教研の東京分室にお越しくださいませ、また都内の何箇所かのお寺さんにも法話をされるということがあって。

それから六月と申しますと、六月六日は清沢満之先生がお亡くなりになられた日でございます。

臘扇忌（ろうせんき）という御命日でございます。臘扇忌というのはご承知のように清沢先生の最晩年の号ですね。臘というのは十二月、扇は扇子。十二月の扇子はいらぬものであるという意味で、ご自身で号を付けられました。最後はこれで、ひゅうどろと消えれば終わり、言い残すことは何もないという。これも大変なことでございます。いわゆる自己卑下ではありません。如来の大いなる恩恵、光、大悲、恵みの前に立つと、臘扇であるという感銘ですね。

その清沢先生の教えを受けられた方が、曾我量深先生でございます。曾我先生は昭和四十六年六月二十日に九十六歳で浄土に帰られました。曾我先生は鸞音という号を使っておられましたので、鸞音忌（らんのおんき）という御命日でございます。

こうして明順寺様でお勤めをさせていただきますと、「正信偈」に説かれております、仏陀釈尊の出世本懐の教え、そしてその教えを印度、中国、日本と伝統してくださった七高僧の方々の教え。そういう大いなる伝統を受けて、この明順寺様でも聞法させていただける、親鸞聖人の教えを聞かせていただける、そういう有難いご縁だなということを感じておることでございます。

今日は「正信偈」の中で、七高僧の龍樹菩薩を讃える一段でございますが、十四頁の大きな段の二行目の、「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定」。この一段について学ばせていただきたいと思えます。

弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る

（真宗聖典二〇五頁）

テキストでは、

だから、阿弥陀仏の本願を忘れず心に憶（おも）い
念じるならば、本願自然（じねん）のはたらきで、
即座に、必ずさとりを開く身と約束され、
迷いに退かない身になります。

というふうに現代語訳をさせていただきました。大変これはもう画期的ですね。教えを短い偈文の中で説いておられるのであります。

八宗の祖師と崇められておる龍樹菩薩がですね、本願念仏の教えを憶念すれば、自然に自ずから即時に必定に入る。必ず現生正定聚に入ると。迷わない身となるというそういうことを讃えておられるのであります。

龍樹菩薩のお仕事としては、仏道に無量の門があるけれども、難行と易行があって、私たちには信心ということを中心にして、念仏をして生きる易行道が、すべての人々に開かれておると。わかりやすい例でもって、難行道は陸路。他の道を一人、自力を励んでいくようなものであると。易行道は水路で、大いなる本願の船に乗じて、皆が平等に共に目覚めの世界に至るようなものである。大変わかりやすい例えで説いてくださったのであります。

何故そういうふうなわかりやすい教えを説かれたかと申しますと、やはりそこには苦悩の深い群萌（ぐんもう）ですね。苦悩の群萌ということがいつも憶念されておる。苦悩の群萌という言葉は、『教行信証』の序文に、

苦悩の群萌を救済し

（真宗聖典 一四九頁）

という言葉として出てくるのでございます。私たちが教えをいただく時にですね、まず苦悩の群萌

であると教えられるということが、まずあると思います。

苦悩の群萌という実感がなければ、教えの言葉は響いてこない。素通りしていくのではないかと。何故ならば、苦悩の群萌が他人事になるという。自分自身のことにならないということとなります。どのように幸せそうに見える方であっても、苦悩がないかということ、決してそうではありません。苦悩する存在であるという。それは十方衆生、変わらない。

群萌という言葉は、非常にリアリティーのある表現でありまして、群がる。萌ってというのは萌す。生えるですね。雑草が生えるように競い合って。ある時には侵犯して領分を犯すという、非常に現実感のある表現であります。この苦悩の群萌であるということをお教えされるということがまず私は大変意味があると思うのです。

苦しみ悩むとき、自分だけが苦しみ悩んでという閉塞性ですね。『大無量寿経』の中に、

身愚神闇 心塞意閉

(真宗聖典 六十頁)

身体が塞がりですね、心が閉ざすという。閉塞性ですね。不思議なもので、心の生活が閉ざされると、姿も生き生きしなくなるのですね。身心一如という言葉がありますけれども。したがって、共に生きていく生活の中で何か問題があればですね、自ずとその人の姿の上に表れるという面があると思います。敏感なというか、優しいという心があれば、今日は違うなど。何かあるのだろうかということ、気が付くわけです。

多くの場合はですね、大体素通りしていくと。何故素通りしていくかということ、自己関心でいっぱいだからです。他人のことを思い、言いながらですね、中々。自我関心といってもいいかもわかりませんが。人様のことを本当に心配するということは中々容易ではありません。心配しても自分を中心にして心配するということがありますので、そういう苦悩の深い人間であるからこそ、念仏の易行の大道を開いてくださった。

そしてそれを、阿弥陀の本願を憶念して、自然に自ずから直ちに迷いのない生活に入ることができると、そういうことを教えてくださっておる。これはあらゆる人間の根本志願ですね。自然というのは、自ずから然らしめられるという自然の法則、真理の法則、はたらきですね。したがって即時というのは、直ちに時日を経ず、今日只今直ちに。そして必定に入る。必ず仏になる身に定まるという。迷いを超える。生々しい表現を用いますならば、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という、迷いの中に巻き込まれて、本当に七転八倒するようなそういう迷いを超えると。

これは人間生活においてですね、苦悩の中に捉われている時、はっきりしていることがあります。それは、このままで良いとは言えない。早く苦しみ悩みから解いてほしいということになります。

例えば家庭の問題で、親子なり夫婦なりが喧嘩して不穏な空気があると、これで良いとは決して言いません。何とかならないかと。それも十年後ではないのですよ。直ちにというようなね。だから人間のまさに苦悩する存在に即応して開かれてくるということがございます。

弥陀仏の本願を憶念すればということですが、親鸞聖人が『教行信証』に龍樹菩薩のお言葉を引用してくださっておるのであります。

もし人疾く不退転地に至らんと欲わば、恭敬心をもって執持して名号を称すべし。

(真宗聖典 一六五頁)

もし人疾くというのは、速やかにですね、速く。不退転地というのは、再び地獄、餓鬼、畜生の迷いの生活に陥らない、埋没しないと。恭敬心ということ、恭しく敬う心ですね。私は敬う、尊敬

するというようなことが現代の生活では本当に欠落しているのではないかと思うのですね。

土壌が荒れているということがありますけれども。土壌が荒れているとですね、子どもが育ってもね、荒れた土壌の影響を受けるということがあります。先程松原先生が、「正信偈」のお勤めをなさっておられたそのお姿のことを申し上げましたが、真宗門徒の家庭では礼拝ということ、お勤めということが行われていてですね、それが自ずから素晴らしい大事な環境を作っていた。

だから家庭の中の中心は、お父さんでもお母さんでもなくて、まあ現代は女性の力が強いと言われるんですが。阿弥陀のご本尊が家庭の中の中心であると。お父さんもお母さんも、皆さんが同じ方向でご本尊にお参りすることができる。これも大変なことでございます。そういうふうな土壌が枯れてきているのが現代という時代ではないかと思うのです。

だから不退転地にいたるということは、現代の言葉で言えばですね、本当の意味の幸せになるということです。そこに必ず本当の意味のが付きます。単に幸せだけならば、健康であったり、金があったり、仲良かったりということですが、本当の意味の幸せということとは、一切の条件を問わずということですね。無条件に人間として生きる、存在するそこに大いなる意味があるという。それは本当の意味の幸せですね。

人は本当の意味の幸せを求めているのでありますが、それが中々わからなくて、自己関心中心の、人間中心の幸せに走ってしまうという問題があるわけです。そういう人間中心の幸せを求めるところにはどうしても争いが起こりますし、また長続きしないということがあります。そういうことを縁にして、不退転地にいたるということが求められる。

それから恭敬心ということとは、本当に敬うということですね。人を敬う、人様を敬うということとは、自分自身もまた尊い何ものにも代えることのできない存在であるということをお教えられる。これは容易ではないと思いますね。

現在も自死、自殺をなさる方が非常に多いのでありますが、やはりそこにはいのちが自分の思い通りにならないと、自らの存在すら否定してしまうということが起こってくるのであります。恭敬心ということがいかに大事であるかということをお教わりますね。

恭敬心をもって執持というのは、これは執着の執ではありません。いつも忘れずに念仏を称えるという。そういうことにおいて、まことの幸せの生活に、いたることができるという意味ですね。

前回もお話しましたが、

もし菩薩この身において阿惟越致地に至ることを得、阿耨多羅三藐三菩提を成らんと欲わば、
当にこの十方諸仏を念ずべし。
(真宗聖典 一六五頁)

阿惟越致というのは不退転です。この身においてということとは、自分自身ですね。他人の問題ではない。そこにはですね、現世。今生きている。今ですね。自分自身においてですね。そしてこれは、いのちの伝統を、いのちの流れを受けてきた。この身というのは単なる個人ではありません。いのちの伝統。その伝統は、始まって已来の伝統なのですよね。

そういうことが閉塞、心を閉ざしますとね、眼が曇るのです。闇になるのですよね。だから大事ないのちをいただいておりながら、いただいておるということに気が付かない。極端な場合は俺のいのちだろう、どうしよう勝手だろうと無茶苦茶なことをね、言い出すわけですよ。それが幅を利かすということがあるわけです。それがいかに、自己中心に捉われているかと。心、身体が閉塞しているかということをお話しているとします。

だから龍樹菩薩が易行道を明らかにしてくださり、本願を憶念して自力の心を離れて、即時に必定に入る、ということとは人間の根本の願いを表明し、そしてそれに応える道であると。この身とい

うことはそういういのちの長い伝統を受けて、煩惱を具足している身であるという。伝統を受けるということと共にですね。

親鸞聖人の明らかに伝えてくださった教えは、本当に大胆ですね。大胆ということは、煩惱具足の煩惱をかけめなく具えておる身が、罪惡の身が教えを聞く、教えに生きる正しき対象であるということをお弥陀の本願において明らかにしてくださっておる。そこには人間が、煩悩から容易に解放されない。煩惱を断じて涅槃を得るということを聖道門では断煩惱得涅槃と申しますが、これは良くわかるのですよ。理想なのです、煩惱を断って、涅槃。涅槃というのは真の覚りを得るという。

これよくわかるのです。誰でもわかることなのです。三歳の子どもでもわかる。だけど、八十歳の老人でもできるかということ、煩惱を断つことができない。断ったと思ってもすぐ湧いてくるという、そういうものですね。

私は煩惱という時にいつも思い起こすのは、皆様方もご存知の親鸞聖人のお言葉ね。

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとえにあらわれたり。
(真宗聖典 五四五頁)

本当に尊い言葉を表現してくださったと思うのです。われらがみというところには、心だけではないのですよ。私たちの身にみちみちて。おおく、ひまなくしてというのは間がないということなのです。絶えずです。とどまらず、きえず、たえずというふうに、二河の白道において教えられた。

そういう人間が本願を信ずるということにおいて、本願を信じ、念仏もうすということにおいて、そういうものから妨げられない。いのちが奪われない。本当に生きていくことができるという、そういう道を教わるのである。だからこの身においてということが、非常に大事。

そしてその身は、煩惱を断じて涅槃を得るという方向では理想には違いないけれども、誠実になればですね、断念せざるを得ないということですね。誤魔化した場合には、私には煩惱がありませんというかもしれませんが、私は煩惱がありませんといって威張るならば、それも煩惱なのです。面白いでしょう。私は覚りましたと。あんた方と違うのだよというならば、それも煩惱なのです。比較の煩惱ですよ。

人間を非常に誠実に表現してくださっていますね。そういう存在が、煩惱を断たずして煩惱の身、全体が如来の大いなる涅槃の光に包まれるという。そういう道があると。

これはですね、清沢先生という方が、明治時代に大変大きな仕事をしてくださったのですが、哲学用語を用いてですね、本当に伝統的な中々わかりづらいというか。我々凡夫の姿は相対有限ですね。相手があって、相対で限りがあると。煩惱を断ちましたと言えるかと。瞬間的にはそういう思いがすることがあったとしても、それは長続きしないという。

絶対無限というのは相対を超えて、無限なのです。絶対無限というのは、それは人間の世界を超えておると。自力を超えておると。まあ本願力の世界。

相対有限はですね、人間力ですね。人間力は相対有限ということは大変醜悪な、恐ろしいことなわけですよ。原爆を作るのも、人間ですからね。そこには自分たちの民族さえ栄えれば、他は滅んでもいいというふうな、大変残酷なね、そういうものが相対有限の人間中心の考えの中には入っているわけでありませぬ。

そういうことが照らされるのが、絶対無限のはたらき、阿弥陀のはたらき。阿弥陀ということは無限ということですね。阿弥陀というのはサンスクリットという言葉でありまして、無限、無量。「正

信僂」は「帰命無量寿如来」から始まりますね。量り知れないいのちの如来様に帰命すると。そこで人間の依り処、帰するところがまず初めに表されておる。

「南無不可思議光」。不可思議光ということは、絶対無限のはたらきなのです。人智ではないのです。人間の自己中心の相対的な智慧を超えた、絶対無限のはたらきである。だから「正信僂」が「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まっていることは、念仏から始まっているということなのです。全体を貫いておると。そういう大事な意味があります。

この身において疾く不退転地を得よということがまず私は、あらゆる人間の根本志願であるということ、はっきりと自覚するということが待たれていると思いますね。

龍樹菩薩を讃える一段はですね、勿論、龍樹菩薩の言葉によって讃えておられるわけで、

この諸仏世尊、現在十方の清浄世界に、みな名を称し阿弥陀仏の本願を憶念することかくのごとし。もし人、我を念じ名を称して自ずから帰すれば、すなわち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得、このゆえに常に憶念すべしと。
(真宗聖典 一六五頁)

というふうに龍樹菩薩が説かれておるわけで、これによって「正信僂」の一段が歌われておる。阿耨多羅三藐三菩提というのはこの上ない覚りの世界ですね。南無阿弥陀仏の名を称えて、その名に込められている阿弥陀の本願、無量寿無量光、智慧慈悲が、名を称えるすべての人々の上に、はたらいて、人間が本当に目覚めるといふ。

目覚めるといふことは、気付くといふことは本当に難しいですね。日本でもカジノを作るといふような話があるけれども、どうですか、そういうことは。政治の世界といふのは恐ろしいですな。儲かりさえすれば良いのですか。どれ程の人間を地獄に叩き落とすかわかりません。賭け事に走っている人間は、賭け事の怖さを知らない。儲ければ楽になると、誇れると、夢のほうにかけると。だからそれが同時に地獄をもたらすものであるということに気が付かない。目覚めがないのですね。

目覚めがなければですね、人はどんな悪辣なことでもするわけですよ。これは個人の段階から国家の段階までね。原爆を作って落としたのは人間ですよ。勝った方は正義で通るのですよ。こういうおかしいことがね、白日正々堂々と通る。だから本当に仏法がなくてはならぬのですね。あってもなくてもいいようなそんなものではない。仏法がなければ、闇が闇だと自覚されない。相対有限が相対有限だと自覚されない。そういう問題があるわけです。

本当の意味の幸せを得ようとするならば、絶対無限のはたらき。阿弥陀の本願に遇ってですね、煩惱の尽きない身であるということ、自分をこれで良しといつてですね、自己是人することができない。そこに本当に教えを聞くといふ。

素晴らしい言葉があるのです。それは聞名。これは仏陀釈尊自身が説いてくださっておるわけでありすが、聞其名号。南無阿弥陀仏の名号を称えて、名号に聞くといふ。聞くといふのは信心を表す意味であると。現代はディベートといふのが非常に盛んで、論争してですね、相手をやっつけると。それに熱を燃やして、相手の欠点を論って、自分の優位性を示して勝ち負けを決めるといふディベートといふことがあります。私は、それは一方的であつて、本当にそれで良いのかといふと、不十分であると思ひます。

何故かならば、相手が自分の欠点を指摘されるならば、そうでありましていふ欠点を認めると。そういうことが事実にあるといふことですね。だからそこに懺悔と讃嘆といふことがある。懺悔といふのは私の存在自身が問題を抱えておりましたと。いのちが大事だといふことを言いながら、量り知れないいのちを食らって生きています。矛盾しているでしょ。矛盾を抱えた存在であると。私

は、人間は矛盾存在だと思えます。そこにどうしても懺悔せざるを得ない。讃嘆というところには、そういう人間自身の姿を教えてくださいの法の実態ですね。実態の教えに遇う。それは自己自身の矛盾している姿を教えられる。懺悔と讃嘆というのは必然的な自然の関係ですね。

現代は特に懺悔ということが欠落しているのではないかと。相手の欠点。自我の拡張。それにもう汲々としているという時代ではないかと。聞くということが衰えますと、無くなりますと、人間関係は荒れます。本当に聞くという、聞く耳。耳が与えられておるのですけれどもね、この聞く耳が。本当に機能することが大事であると思えますね。

そういう人間の生々しい現実立って、憶念するという。憶念ということもこれは素晴らしい言葉ですね。憶ということは心に確かに持(たも)つ。憶持。しっかりと心に持つ。念仏ということは、明らかに心に刻まれて忘れない。忘れても忘れても思い起こして持つていくと。

人間には思い起こすという、憶念ということが人間の上に表れている。これはもう本当に大きな恩恵です。はっきりしているのですよ。例えば歳をとって、身体が動かなくなると、仮に寝たきりになって、横たわっていてもですね、憶念はできると。そうではありませんか。道路掃除とかそういう大事な仕事はできなくても、憶念はできる。だからギリギリの人間の姿、生き方の上に憶念ということが与えられていると。そういうふうにいただくことができると思えますね。勿論それは老少善悪の人を選ばれずということでもあります。それは、いつまでも続いていくという。いのちのある限りという、そういうことが言われております。

親鸞聖人はですね、この憶念ということを非常に大事にしておられまして、

本願を憶念して自力の心を離るる

(真宗聖典 三四一頁)

これはもうキーワードの中のキーワードではないですか。阿弥陀の本願を憶念して、本当に深く思い、念じてですね、それをいつも持つ。名号を称えるということがありますが。

自力ということについて、非常にはっきりとした懇切な注釈を親鸞聖人はしてくださっておりますね。

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのむ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのむひとなり。

(真宗聖典 五四一頁)

自分で良いと思うことをいっばいすると。それによって私は良いことをした。善人であるというふうな立場に立つ。これは名前を出して恐縮ですが、トランプさんは良いことばかりを言いますけどね、どうでしょうか。まあ自己宣伝のうまい方だなと、ごめんなさい、名前出して。やっぱりね、自力の心というのは国際的なのですよ。日本人だけではないのです。あらゆる人間の問題なのですよ。普遍というのね、普も遍もあまねくですよ。あまねく行き渡る、通ると。自力という問題は、人間がそこにおるならば、自力の計らいがあると。やめられないと。そういう問題ですね。

そういう根本的な問題にいつも視野が当てられておる。それは本願の眼であるという。本願の眼ということは、十方衆生を救い遂げんと。十方の衆生という所には、一人も漏らさずということが同時に願われている。これが大事なのですね。一方的な話ではないですよ。十方衆生ということの具体的な姿は、一人も漏らさず、私とその一人として生きておるといふ。我らという言葉が大事なところでですね。

「十方衆生」というは、十方のよろずの衆生なり。すなわちわれらなり。

我がそこにおるのですよ。われらという所には、多くの人々と共にね。われらという感覚がね、欠けるということが大問題ですね。だから何か起こった時に彼らの問題になって、彼奴の問題になって、我らの問題にならないという。本当の意味の文化ということから言えば、私は我らの問題ですねという。これがね、大事な問題だと思われませんか。そこに懺悔が懺悔となるという、そういうことがあるかと思ひます。

それから憶念ということで忘れることができないことは、『唯信鈔文意』の中で、

憶念は、信心をえたるひとは、うたがいなきゆえに、本願をつねにおもいずるころのたえぬをいうなり。
(真宗聖典 五五一頁)

信心に目覚めた人は疑いがないと。本願が明らかに人間を照らし、罪惡の身を照らし救い遂げてくださるといふ、そういう疑いなきがゆえにといふ。疑わないのではないのですよ。疑っても疑っても、疑い得ない程、明らかになる。これが信ということですね。疑いなきといふことは深い意味があります。人間のどのような疑いをも、疑う必要がない程、はっきりとした眞實の教えであると。

先程老齡のことを申し上げましたけれども、男も女もそこに人間がおられるならば、いのちある限り本願を憶念することができる。これ程の教えですね。本願を憶念することにおいて、自分自身の目覚め、存在の目覚め、生かされて生きておるといふそういう本当の自覚が与えられるといふことは、もうこれ程大きなことではないと思ひますね。本当の意味の自覚です。

例えば親子の関係でもですね、自分は親と言へるかといふことを問いとして出すときに、世間的には仮に誇ったとしても、二十四時間子どものことを忘れていないとは言へない。親の功利性といふものに動かされるときがある。子どもの成績が良ければ誇るといふようなことがね、煩惱が働くといふことがある。子どもに問題があれば、極端な場合は、なんでこんな子どもを産んだのだろうと、これは連れ合いに似たなど。

人間といふのは相對有限な問題であつて、本当の自覚といふことは中々困難です。本当の自覚が与えられると、子が誕生してくれたことにおいて、親となつたと。親となりつつあるといふ、現在進行形ですね。自覚といふ問題は、私はいつでも現在進行形だと思ふのです。いのちのある限り覚つたといふことに留まらない。わかつたといふことに留まらない。いつでも、いのちのある限り、いただいておるいのちの深く重く大事なことを教えられていくといふ現在進行形。

そしてこのいのちは欲望のための手段でも道具でもなければ、目覚めた、仏になるといふ方向に開かれておる存在であると。そういうこの大きな意味をね、与えられていると思ひますね。だから本願を憶念して生きると。本願に生きるという生活が私たちの上に開かれている。

それから一番初めの巻頭和讃と呼んでおりますが、これは仏教讃歌として歌にも歌われておりますけれども。浄土和讃、一番上の段ですが、

弥陀の名号となえつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
仏恩報ずるおもいあり

(真宗聖典 四七八頁)

これも大変な歌ですね。南無阿彌陀仏の名号をとなえ、そして信心に目覚めた人は、いつも忘れず、

しっかりといただいて、仏恩報謝のおもいがある。これはもう大転換でしょ、仏恩報謝という。

真宗では「恩徳讃」ということが非常に大事にされますけれども。祈祷祈願ではないのですよ。祈祷祈願は金が儲かりますように、病気が治りますように、宗教というと、ともすれば祈祷祈願が宗教であるというふうに言われかねないです。それが多いのです。それが人間の止むを得ない現実だと思っただけなのですが。

ああ、なんだ、自分の欲望を神様や仏様に押し付けていたかということに気付くということがね、大事ですね。なんだ、信心者のような恰好をして、自分の要求をね、神様や仏様に押し付けていたのだということに気付けば、浅ましさがわかるのですね。懺悔する。もうすでに絶対無限のはたらきは、大いなるものを私に与えてくださっておると。いのちであると。存在しているという、生かされて生きておるという存在の事実ですね。これが大いなる存在の事実というところには、どれ程の尊いいのちの恩恵をいただいているかわからない。どれ程のご苦勞をいただいでこの身があるかわからない。すでにしてそういう恩徳を受けている身である。

まあわかりやすい例で言えば、歩けなくなってね、寝たきりになったときに歩けるというのは大変なことだったのだということに気が付くわけですね。目が見える、話ができるのも当たり前だと思っていたけど、不自由になってみると、目が見える、新聞が読める、テレビが見える、家族の顔が見えるということは大変な事であったのだなあということに気が付くわけですね。目覚めるわけですね。それがなかなか容易ではないのですよ。

疾く速やかにこの身において目覚めを得るということは、まさに南無阿弥陀仏の念仏において開かれてくる教えであります。この歌を私たちの生活の中で歌うことができるということは本当に大いなるね、生活が開かれておるという意味を持っておると思います。

曾我先生がよくおっしゃっておられたお言葉なのですが、

如来に信ぜられ、
如来に敬せられ、
如来に愛せらる、
かくて我らは、
如来を信ずるを得る

如来様に信ぜられ、敬せられ、愛される。この愛は本当の愛ですね。如来に信ぜられておるなんてことは大変なことではないですか。驚天動地という言葉がありますが、天地がひっくり返るような言葉でしょう。もうすでに如来に信ぜられていたのではあると。敬われておる。なんと尊いいのちをいただいて生きておられるではありませんかと。本当の意味でそのいのちを大切に、愛していかなければならないでしょうという、そういう如来の信頼、尊敬、本当の愛というものをいただいて、私たちは如来を信ずることができるという、大いなるはたらきをいただいていると思いますね。

時間がだいぶ経ちましたので、最後にですね、親鸞聖人が龍樹菩薩を讃えた和讃が十首歌われておるのでありますけれども、二、三、読ませていただきたいと思います。

不退のくらすみやかに
えんとおもわんひとはみな
恭敬の心に執持して
弥陀の名号称すべし

(真宗聖典 四九〇頁)

生死の苦海ほとりなし
ひさしくしずめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせてかならずわたしける

(同)

生死の苦海ほとりなし、これもですね、響いてくる、訴えてくる言葉ですね。際限がない。ひさしくというのは、その迷いの中に捉われておる。本願の大悲の船に乗せて必ず目覚めの世界に至らしめられるという。

恩愛はなはだちがたく
生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし

(同)

愛しい、愛するという御恩をいただいたという人間の身近な関係で言えばですね、子どもの死とか親の死というものが計算で終わったようにはいかないと。飯も食べられない。まあ色々なことが起こってくるわけです。罪障を滅するという事は、本当に目覚めた世界に至ることができる。特に私は龍樹菩薩のことを思いますと、青年時代ね、愛欲に狂ったという時代がありましてね。それでは解決にならないということを感じておられたと思うのですよ。

恩愛はなはだちがたし、生死はなはだつきがたしというようなことはね、本当に実感がある。私たちの現代生きておる恩愛はなはだちがたいという、生死はなはだつきがたいというそういう人間の生活の上に、大きな光を照らしてくださり、念仏して信心に目覚めていくということ、教えてくださっておるということでございます。

時間が大分経ちました。後の座談が大事でありますので、話のほうはこれで終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。